

まえがき

本書は、私たちが出版する第3冊目の国際金融論のテキストである。第1冊目のテキストは『国際金融のすべて』と題して1999年に出版した。第2冊目は『現代国際金融—構図と解明—』と名前を改めて2006年に出版した。今回、第3版を企画したのは、2007年夏のサブプライム・ローン問題の顕在化、2008年9月のリーマン・ショックを受けて国際金融の諸事象の有り様が全世界的に大きく変わってきたからである。

その変化を考慮して、本書の第Ⅱ編「現代の国際金融」は構成が以前のものとは大きく変更されている。第11章、第12章、第13章は、すべて、07年以來のアメリカから発した金融危機の全世界への広がり、と基軸通貨ドルのゆくえを対象としている。第11章では、サブプライム・ローン問題、リーマン・ショックなどのアメリカにおける金融危機とアメリカ政府の対応策を、第12章では、危機の欧州への波及の様相、西欧における住宅バブルの崩壊、中東欧からの資金流出と危機の深化を論じている。最終章では、前章に引き続き、世界全体の経済危機の進展のなかでのアジア（日本を含む）の状況、中国が世界の危機再生のエンジン役を担えるのかどうか（「デカップリング論」の如何）、そして、最後に基軸通貨ドルとドル体制のゆくえを論じている。

それらの章以外にも、第Ⅱ編ではいくつかの章の内容がかなり変えられている。第6章では、ドル体制という用語が昨今よく使われながら、それがどのような体制なのかははっきりしていなかったのを

明瞭にし、その変遷をアメリカ経常収支赤字のファイナンスと関連させながら論じられている。第7章では、多国籍銀行、ユーロ・カレンシー市場については紙幅の関係もあり簡単な論述にとどめ、デリバティブ市場の解明、ヘッジファンドなどの機関投資家化が進行していった実態の分析に重点が置かれている。第8章から第10章においては前の版の叙述が基本的に継承されている。しかし、当然のことながら前の版が出版されて以降の新たな諸事象を踏まえて、かなり大幅な加筆がなされている。第8章では西欧全体でのユーロの地位の上昇が着実に進んでいること、第9章ではアジア通貨危機後において通貨・金融協力の問題が提起されながら大きな進展がみられないこと、第10章では東アジアにおける諸通貨の「連動性」がシンガポール・ドルと人民元が中軸となりながら進んでいることが論述されている。

第I編の各章は第II編と異なり、資料を新しくしたこと以外には叙述の基本的視角と内容は前の版とほとんど変わらない。第I編では国際金融論の基本的内容、範疇が簡潔に記述されている。

今回の改訂では、以前の執筆者が病気になるたり退職を迎えたこともあって、執筆者の変更を余儀なくされたが、改訂にもかかわらず本テキストの基本視角は前版と変わらない。

本書の読み方としては、第I編をしっかり学習してのち、第II編の関心のあるテーマの章を読み進めていくのがオーソドックスであろう。また、07年以降の今回の世界的な金融危機を扱った第11章から第13章をまず読み、それから、再度、第I編や第II編の他の章に立ち戻る読み方もあろう。しかし、国際金融についての深い理解を身につけるためには第I編の各章の学習は欠かせないと思われる。

2007年以降の全世界の大不況は金融危機から発生した。このこと

から明らかのように、今日、国際金融についての知識なくして、世界経済はもちろん各国経済、そして主要産業における企業経営について語ることは不可能であろう。本書が大学でのテキストとしてだけでなく、広く国民に読まれることを願っている。

2010年1月25日

編 者